報告

声と音で表現する地域・環境の価値

佐藤壮広

自分たちが住む地域の景色や人間関係の価値をあらためて認識することは、なかなか難しい。しかし、集っておしゃべりすれば、その価値を表現する言葉は溢れ出てくる。それらを捉えて詞に整え、歌う。また、音楽を奏でてみる。これが「歌う人間学」ワークショップである。各所で実践してきた歌と音による価値掘り起こしの事例を紹介する。

地域の歌づくりワーク

2004年ごろから、大学の授業やまちづくりで関わった地域などで歌づくりワークショップを行ってきた。2008年には、神奈川県川崎市登戸の「東通り商店会」の夏祭りに参加し、地域の人たちと一緒に歌を作った。この企画は、アサヒビール株式会社が社会貢献事業として進めている「アサヒ・アート・フェスティバル2008」の後援を受け、登戸のまちの応援団「のぼりとゆうえん隊」が実施したものだ。「ノボリトのまちを受信する-ノボリト・アート・ストリート2008-」と題し、７月から９月にかけて行われた。

地域交流ファシリテーターのおきなおこ（現・愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター講師）が、このフェスティバルに参加しており、夏祭りの企画として「おかみさんパレード」という催しを計画していた。それに乗り入れる形で、私もこの企画に加わったのである。東通り商店街に限らず、全国各地の商店を実際に切り盛りしているのは、そこのおかみさんたちだ。しかし、彼女たちは普段あまり表に出ては来ない。おきはおかみさん会の集会に参加して彼女たちを口説き落とし、８月の夏祭りの時に皆で仮装パレードをするということで話をつけてきた。私の役目は、パレードで歌えるまちの歌を作ることだった。おかみさんや商店街の人たちから登戸東通り商店街の魅力や地域的な特徴について話を伺い、また地元の楽器店・黒田ギターのフロアで「まちの詞づくり」のワークショップを実施し、近所の居酒屋のスタッフも巻き込んでミニライブも行った。それらの機会に多くの地元の参加者が残した言葉のメモをもとに、キーワードを定め、詞として整えたのが以下のブルース調の歌である。

♬のってこよってこ東通り商店街
（詞：東通り商店街の皆さん+コールさとう
　曲：コールさとう）

ここにおいでよ　なんでもあるよ
ここは小さな暮らしの遊園地

歩けば心も　ウキウキさ
のってこよってこ　東通り商店街

ここにおいでよ　緑もいっぱい
古い道と新しい道がここで出会う

歩けば心も　ウキウキさ
のってこよってこ　東通り商店街

商店街は登戸駅と向ヶ丘遊園駅に近接しており「遊園地」がキーワードとして浮かんできたので、商店街を「暮らしの遊園地」と表現した。「緑もいっぱい」とは、近くの「生田緑地」をかけたものだ。またこの地域は宿場・交易の町として栄え、津久井道という街道も走っていることから、「古い道と新しい道」が交差する様子を入れた。音源をCD

写真１「おかみさん会パレード2008」では仮装したおかみさんたちのパワーが炸裂

写真２　東通り商店街の東屋精米店で定期的に開かれるミニライブで「♬よってこのってこ東通り商店街♬」を披露

に焼いて商店街の事務所に届けると、なんとしばらくの期間、有線放送で「♬よってこのってこ東通り商店街」を時報がわりに流してくれた。現在でも地域の催しの際には、地元のオヤジ・バンド「namazun'Z（なまずんず）」が時々歌ってくれている。

この登戸での詞づくりワークショップを皮切りに、これまで東京都国立市大学通り商店会、福島県いわき市高部地区、東京都豊島区や品川区の文化講座などでも、地域の人たちの地元愛をフレーズとして出し合い、それらを整えて詞にし、一緒に声に出して歌ってきた。大学の授業でも、学生たちのキャンパスライフの意義を表現し共有する同様のワークを、時々実施している。2021年７月31日には、東京都調布市北部公民館で地元の小学生10人も参加して「平和の想いを詞にのせ」と題する平和事業・ワークショップを実施した。

私が手がけるこれら一連のワークショップの狙いは、「いま・ここ」の価値を掘り起こし、言葉で表現し、詞・歌でもってそれを共有することである。地域の文化や環境を捉え直し、新しい価値を発見し、可視化、共有化する際にも、この「詞づくりワーク」は有効である。

平和の音づくりワーク

続いて紹介するのは、2012年６月23日（土）に開かれた日本平和学会2012春季大会（沖縄大学・那覇市）の事例である。６月23日は沖縄県が定めた「沖縄慰霊の日」にあたる。私は仲間と共に部会企画「奏でる平和、祈る平和：沖縄精神文化の平和創造力にふれる」を立案し、「平和の音づくり」というワークショップを行った。そこで使用したのは、シェーカーと呼ばれる小さなタマゴの形をしたパーカッションである。参加者全員で、それぞれが思い描く「平和の音」を鳴らし、その音を共有し、なぜその音が平和を表現していると考えるのかを述べあった。

参加者は20名ほどで、最初に全体で音を出し、相手の音を聴き合うアイスブレイクをした後、４つのグループに分かれて「平和の音づくり」にチャレンジした。ミニシェーカーを振ると「シャカシャカ、シャカシャカ」、「サラサラ、サラサラ」、「ジリ、ジリ」などの音がする。国際政治学者・武者小路公秀と国際経済学者・西川潤の両氏もワークショップに参加し、同じグループでシャカシャカと音を鳴らしていた。日本の平和学を牽引してきた両氏が、平和という言葉、概念にどのような音でアプローチするかという点は非常に興味深く、またその奏でる「平和の音」を聴く機会としても、ワークショップはとても貴重な機会となった。

このワークで得た知見は、音を通して平和の概念について考えることが非常に創造的な営みであるということだ。あるグループは、メンバーそれぞれがシェーカーを握りつつ静かに音を出し、合わせた。理由は「平和は静かで穏やかな状態のことだから、音もそのような感じになるように創りたいと思ったから」とのことだった。別のグループは、４拍子のリズムでシェーカーを振り、皆が同じ音を奏でた。理由は「平和な状態になるにはまとまることが必要だと考えたから」ということだった。もうひとつのグループは、最初にひとりが音を立て、それに２人目、３人目が加わり、最後には皆でリズムアンサンブルを創った。理由は「平和は創っていくもの。それを音で表すとこのようになるから」ということだった。グループの主題は、「平和とはどのような状態のことか」、「平和の条件とは何か」、「平和を創るにはどのようなアクションが必要か」に、それぞれまとめることができる。このワークショップでは、音で考え、音でつくる平和学の芽を確認することができた。

まとめと展望

以上述べたように、声と音で表現し考えるワークは地域の価値を可視化（＝歌詞化）し、また大きな概念を身体表現へと引き戻して再考する機会となる。ESD研究所のプロジェクトの一つとして、立教大学のキャンパス環境や豊島区池袋の文化・環境の価値の掘り起こしなどのワークショップも実施したいと考えている。

写真３　「歌う人間学」ワークショップで使うミニシェーカーとブルースハープ

佐藤壮広（さとう・たけひろ）山梨学院大学学習・教育開発センター特任准教授。立教セカンドステージ大学、立教大学文学部兼任講師。各地でフィールドワークをしつつ、詞とメロディでその体験を表現する「歌う人間学」を実践・探究している。著書に『沖縄民俗辞典』（共編著）、『政治と音楽』（共著）など。